



託された名札

堀越正己

大学の四年間、無我夢中でラグビーに打ち込んできた。早稲田大学ラグビー部では、毎週火曜日に前週のパフォーマンスを踏まえて、選手のチーム分けが発表される。プラスチックケースに入った紙の名札が、ボード上に分別されたA〜Fチームのいずれかに掲示されるのである。四年間、そうした競争の中で、部員の誰もがAチームに名札が掲げられることを目標として猛練習に打ち込んだ。

そんな大切な名札を四年生のある先輩から託された。一緒に茶色の便箋で二枚の手紙ももらった。早稲田大学ラグビー部十六年ぶりの日本一を目指して戦った東芝府中戦。昭和六十三年一月十五日試合当日の朝である。さらに、十三人の同

じポジションの人からの激励の言葉を綴った色紙もあった。

ラグビーは時に、格闘技であるとか、ルールのある喧嘩だと評されることがあるが、当時の私は毎試合、命を懸けて戦っていた。相手との体格の差がその覚悟の大きな要因だが、怖いと思ったことはなかった。

それまで、自分のために戦っていたように思っていたが、いろいろな人の思いを背負って戦いの場に立っている喜びと、責任を感じる事が出来た。

「ラグビー人生の最後の八十分をおまえに託す。俺の名札を俺の身代わりとして贈ります。ぜひ、身につけて、俺の分まで走り回ってくれ」

茶色の便箋に書かれていた最後の言葉である。私は、前回の試合で痛めていた左太もものサポーターの中に名札を忍ばせて戦った。いつもとは違う力が出ていたと思う。スタンドの声援が力になり日本一を獲得した。

試合終了後、自分自身でも最高の笑顔だったが、スタンドで泣きじゃくる先輩を見つけ、緊張からの解放だったのか、



ほりこし・まさみ ●立正大学ラグビー部監督。東京都生まれ。早稲田大学卒業。熊谷工業高校でラグビーを始め、3年生で高校日本代表に。早大進学後は日本一を経験し、19歳で日本代表入り。卒業後は神戸製鋼で1991年から94年まで計4回日本一となる。現役引退後、立正大学ラグビー部監督。2014年に女子7人制ラグビーに特化したNPO法人「ARUKAS KUMAGAYA」を設立。

埼玉県熊谷ラグビー場にて

Photo:Shiro Miyake

その後私も長い時間泣きじゃくっていた。今でもこの手紙を読むことがあるが、自然と涙が出てくる。メールやラインで気持ちを伝えることが当たりまえの時代になったが、やはり手紙には重みがある。左太もものサポーターに忍ばせていた名札は試合終了後そこにはなく、先輩に託したが、「国立競技場の土になったのだから本望だ」と言ってくれた。

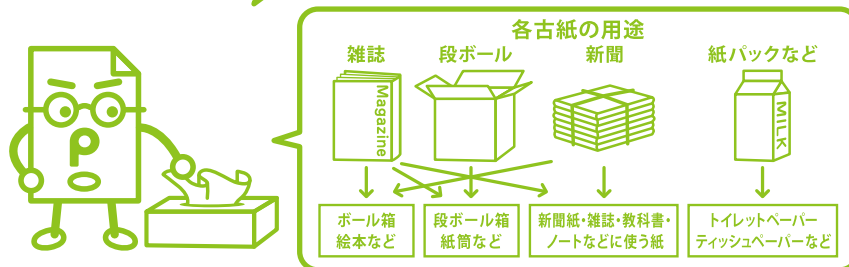
一大学のチームが戦う試合でもいろいろなものを背負って戦う。今年九月二十日から国を背負って戦うラグビーワールドカップが、ここ日本で行われている。背負ったものが大きければ大きいほどプレッシャーにもなるが力にもなる。

「4年に一度じゃない。一生に一度だ。」のキャッチコピー通りだと思う。ぜひ、鍛え上げられた身体と身体のおつきり合いと、思いのぶつかり合いを堪能していただけたらと思う。

ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動

回収された紙、次は何になる？

段ボールはまた段ボールに。紙パックはティッシュやトイレトペーパーに。そうやって、一度使われた紙は回収されて、また新しい紙へと生まれ変わっていきます。あなたが毎日いろんな場面で使っている紙とも、またどこかで会えるかも。



紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイトをご覧ください。

<http://kamitsubu.com/>

今回は10月31日号、海堂 尊さんです。

提供 ● 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>